

第4回国際比較生理生化学会議に出席して (於：バーミンガム)

理学部 生体制御学科 寺 門 潔

この国際会議は4年に1回、世界の主要都市で開催される。今回の開催地バーミンガムはイングランド中央部の大都市で、古くはJ.Priestlyによる酸素の発見(1774年)、世界で最初にガス燈のともった街、また、蒸気機関を発明したJ.Wattの活躍した街として知られている。今日ではヨーロッパに於けるさまざまな国際会議の主要な開催地の1つとなっている。会場のInternational Convention Centre (ICC)は市の中心地にあるCivic Centreの一角にある。前には大きな広場があり、その中央にある“前



進”と名づけられた群像にはDNA構造の基本則(A:T, G:C)がさりげなく書かれているのが目についた(写真)。

今回の主要テーマは、1)運動系と運動、2)ガス交換、3)代謝的適応、4)神経生物学(神経内分泌学を含む)、5)膜を介しての輸送の5つで、それぞれのテーマの下に8つ、計40のシンポジウムがもたれた。テーマ毎にポスター・セッションも同時開催された。いずれも問題意識としては、生

物の多様性は如何に存在するか。そして、多様性を現わす個々の過程の理解とそれらを相互に比較することによって、生物体が全体として如何に恒常性を維持しているかをよりよく理解するということがある。関連行事として5つのPlenary Lecturesと1つのPublic Lectureが催された。

参加者は予約者540名に当日会員を加えて600名程度と思われる。日本からの参加者は93名でaccompanying persons約20名を加えると5~6人に1人は日本からの参加者であった。シンポジウムはテーマによっては満員のところもあったが、私の出たかぎり、殆んど座って聞くことが出来た。議論は活発で要領を得たものが多かった。これには即応性のあるOHPをすべての会場に用意してあったことが効を奏した様に思われる。

Tea/Coffee breaksでは外人と同席することも多いが、その時の話は勢い発表内容についての質疑や研究発展の可能性などについての会話が深い。そのような会話の中で気づいたことを述べてみたい。研究が技術的に難かしそうな話になると、時々、You are Japanese.(君は日本人だろ)と声を大きくして言われることがある。これは日本人だからやれば出来るだろうというほめ言葉である。今回もまさにそのような意味で用いられた現場に出会った。ところがとっさに喜べなかったのである。というのも欧米人の研究に対する考え方として、問題の提起・発想がその後の労苦に満ちた解明より優位にあるとする価値の置き方があるとしばしば聞いていたからである。実際、戦後欧米、特にアメリカに渡った研究者の中には優れた研究成果を挙げた人も数多いが、その栄誉は問題の提起者の上に輝いている。一方、近年、欧米にも証明や解明の実行者に対する評価を見直そうという空気があるという。これには優秀な

頭脳だけでは解決されず、緻密さ・繊細さ・粘りといった“人間的”要素が必要とされる。どうも、少なくともこちらにおいては日本人は高い評価を受けている様である。会議の間に立ち寄った近郊の有名なお城の一室に、17世紀に日本から贈られたという数少ない磁器が飾られているのを観て、その色彩の美しさ・繊細さに思わず感嘆した。恐らく、何世紀も前にそのような芸術品とそれを産み出した人の能力・色彩感覚・繊細さは驚異の目で見られたに違いない。開闢以来の豊かさに恵まれた今日の日本は世界にどんな驚きを与えることが出来るであろうか。